

1971年秋季大会（札幌）学会インフォーマル・ミーティング

気象学長期計画委員会*

駒林さんの報告に対して（就職問題）

○over doctor の問題が全国的に深刻化している。就職の可能性が試験だけというのはおかしい。それ以外の選抜の手段はないか。

○学術会議に具体的な資料を出してほしい。

○現在の人事院の試験（物理職）は（気象、地物）のコースをとった人々には不利である。又、大学院生程不利。

○必ずしもそうではない。合格者数は院生の方が多い。（合格率は出していないが）

○院生：気象庁なら気象研に入りたい、地方は困る。

○広田：とに角勉強しろというだけに聞えるが。

○村上：研究のために doctor course にいるのだから、それが続けられない就職は望まない。

（気象庁での仕事）

○気象庁は、単にアカデミックな研究のみならず、かなりの部分「実学」を要求する所だから、その点をよくのみこんでおいて欲しい。だからこそ大気物理研の必要性があるのだと思う。個人の希望だけで気象研をみないで、気象庁の側からもみてほしい。ただアカデミックな研究だけで入っても、結局やめるまで気象研にしがみついている事になる。

○望み薄といわれる「大気物理研」を、是非もっと推進されたい。

○駒林さんのとり上げたテーマは応用ばかりだが、例えば太陽の大循環というようなものが出ていないが。

○大学をどうするかというなら別だが、これは気象庁を中心とした報告だから。

○自分は大気電気を専攻しているが、air pollution のような社会と密着した方向とどう調和させるか、苦しんでいる。

○気象庁の環境が悪いことは認めるが、今や世界的に知られた大山さん、荒川さんといった人々も、以前は現業にいた。現業や地方から出てきた人に聞きたいが、それにつぶされないで活動するにはどういう環境が必要か。

○現状は以前より勤務がきつくなっていると思うが、自分の場合は数値予報グループと連絡がとれて、いろいろお世話になった事が非常によかったと思う。

こうした「民主的」研究グループの役割をもっと重視すべきだ。

（地方にいる人々と研究や学会誌の関係）

○地方の研究に対する要望をみると、超過勤務手当に対する要求が多い。

○駒林さんの報告に賛成。地方での研究が盛り上がるよう学会の支援をもっとほしい。

○地方の人もなるべく「天気」、「集誌」といった学会誌に投稿して、学問的な批判と支援をうけるべきで、必要なら Applied Meteorology の雑誌をつくるとよい。「研究時報」、「Geophysical Magazine」、「Papers in Meteorology and Geophysics」は廃止したい。

○自分は「図書月報」速報をもらって、利用もし、又貢献もしてきた。

（「天気」地方編集委員に、自動的に調査課長になっている件については、地方の研究の大要と、学問的 level の現状をつかんでいる、いないの両論が出された）

○（「天気」編集委員の立場から）既成の研究者が研究を続けて行くこと、また新人が育って行くこと、その双方について考えると、研究を何らかの形で論文なり報文なりで発表することと関連しているように思う。（この点は「天気」の編集委員としての体験からも裏付けられる）。換言すると、既成の研究者は論文を書くことによって研究活動が持続され、新人は論文を書くことによって研究者として育ってゆくとも言えるのである。したがって、論文のレフリーをお願いする場合もあるかと思うが、内容の誤まりを正すことはもちろんであるが、それとともに是非、研究を励ますようなコメントをいただくようお願いをしたい。

インフォーマル・ミーティングの席上の発言は以上のとおりであるが、要は管区や地区の研究会で発表される論文のうち、印刷されて一般研究者の目にふれるのは全体の1~2割にすぎず、残りは陽の目を見ないで埋もれてしまう現状を考えると、大学や研究所などの研究に恵ま

* 天気 1971年9月号掲載
執筆 新田 尚、駒林 誠

れた環境にいない研究者の卵を発掘し、育成する意味から、長期計画委では管区研究会の問題とも関連して、発表論文を組織的に印刷できるようにするにはどのような対策があるかを考える必要がある。

丸山さんの報告に対して

○この長期計画は就職を主とした感もあるが、単なる就職口の確保だけでは、たちまちつかえてしまって、その後の人々に再び就職難が生じるだろう。

以上文責 新田 尚：電計室

現場の研究環境

○研修の充実、図書の整備など大いに賛成である。その線で学会から気象庁に勧告して欲しい。

○外国雑誌をとることを測候所に義務づけるとよい。

○図書月報にときどき執筆者として大学の人を入れると物の見方の交流がおこなわれるだろう。

○天気地方編集委員には、管区の調査課長がなっているが、その人たちは地方の論文を発掘することはできるが、全国誌である天気に適しているかどうか判断に迷って、つい管区出版物の方へ原稿をまわす向きがある。

○気象庁の職場の中に研究に対して理解のたりない人がいて、フィルム反転器など、「少数の人の使うものだから」と言う理由で購入してもらえない。

○すべての人が研究そのものを行なうと言うわけにはいかないが、研修を若年層と中年層に充実しておこなえば、研究の必要性に対する理解は今より高まるだろう。

○研究用の超金費をみとめて欲しい。職場の現実の中にあっては、図のトレースをおそくまでやることなどに超金費が必要である。

○図のトレースは外注すればよい。超金が付かないと研究しないと言う姿勢はよくないと思う。

○管区へきている金の中に、学会出席へまわしてよいものがあることを調査課長の私は知らなかった。管内の調査旅費にすべてまわしていた。

○九州の大会(1969秋)のあとの地区研究のあり方討論会で、1人でも学会へ出したいと強い要望があり、京都の大会(1970)のシンポジウムで案がまとまって、気象庁へ申入れた。学会としては、その効果もあって、研究用の金が管区についたと理解している。

大学院生の就職先の問題

○全国の気象関係で、6名のオーバードクターがいて、アルバイトにおわれ、研究できない。

○今年気象庁で上級甲の公務員試験で10数名採用したそうであるが、オーバードクターの人は受験したか。

○その人たちが必ずしも積極的な姿勢で公務員試験を考えたかどうかはわからないが、大学院生は受からない。学部学生が受かる。

○それなら学部学生のうちに受験してもよいし、最近では大学院生の合格率が高く、今年は修士課程の学生がもっとも多かった(物理職)と聞いている。

○単に刻苦勉強して合格しろでは解決にならない。大学院生が研究者になれずにつぶれてしまう数の統計はあるか。

○統計をとったことがないが、本人が研究者に適していなかったことが原因である場合を過少評価することはできない。

○気象界が冷たんならば、コンピューターの会社へ転進しようかと言う大学院生もいる。

○公務員試験を通らなければならないと言うことは、大学院時代の研究を一切評価しないことか。

○気象庁では、ぜひ来てもらいたいほどの仕事をしている人は、必ずしも公務員試験を通らなくてもとっている場合がある。

○気象庁は研究者の層を厚くしたいと言いながら、研究に適さない職場にまわすのは無責任ではないか。また気象庁の職場がどれほど魅力的な仕事をしているかわれわれは知らない。

○あたえられた環境が研究に適していなかったら、自分で環境を改善するくらいの開拓精神の人に来てもらいたい。またはいりたい人はいつでも気象庁へあそびに来て、何をやっているか自分の目で見てほしい。それ位の積極性を期待したい。

○東京の人は本庁へ行って聞けるが、地方の人はできない。

○大学院へ研究しにはいったのだから、われわれが研究しやすい環境をさがすことは当然である。気象庁は研究に向いているとは言えないが、もし気象庁の中なら研究所を志望するのは当然である。

○そのような気持で気象研究所へはい人は、しがみついて決して動かないと思う。自分のことを半分、気象庁全体のことを半分は考えて欲しい。

○やたらに研究機関を志望しても、またその若い人の就職先にたちまち困ることになる。せまい意味の研究機関に固執する態度には自己どう着があるのではないか。

○気象庁内の研究環境の改善については、スピーカーの提案のとおりでよいと思ひ、ぜひ推進してもらいたいが、大学院生の就職先については、学会が若い研究者の層をふやすていねいな方法を考えて欲しい。

○気象庁は若がえりの時代にはいろいろあり、研究環境についても悲観的なものではない。

環境破かい等の問題

○今日のスピーカーは口をそろえて環境問題をとなえたが、なぜそれがとう突にでてきたか理解しがたい、上層大気の研究とか、惑星大気の研究も重要である。

○現代は単に科学の事ばかり考えていたのでは科学者でありえない。どうやって人類を破滅から守るかを常に考えなければならない。ただその具体的なあり方として、たとえば私について言えば、今までやってきた

雷の研究と環境問題をどう結びつけるかに苦しんでいる。

○今日は職場の研究環境を論じるために実学の側面を強調してしゃべった。国連から勧告されている食糧問題、人口問題などの中から、環境破かいと水資源の問題を、単なる技術者集団だけでは解決できない新型の問題としてとりあげた。アカデミーの側面が中心議題の場合には、また別のとりあげ方ができる。

○研究者、技術者の研究環境を学術会議がアフタケアする考えなど、気の付いた点はどんなものでもよいかから学術会議の議長へ手紙で申し入れしてほしい。手紙がたまと委員会へまわして審議することができる。

以上文責 駒林 誠（気象大）

日本気象学会誌

気象集誌

第II輯 第49巻 第6号 1971年12月

廣田 勇：冬期成層圏におけるプラネタリー・ロスビー波の励起機構	439—449
林 良一：有限の深さのエクマン層における赤道大規模波動による摩擦収斂	450—457
林 良一：地面摩擦の存在の下で対流熱放出により不安定化した大規模赤道波動	458—466
野本 真一・巽 保夫：“類似示数”による型の分類と予想天気図の検証	467—483
近藤 洋輝：有限の熱伝導率および厚さをもつ壁に囲まれた流体の対流の線型安定論	484—493
初山政子・片山功仁慧：死亡の季節変動の統計的解析	494—509

要報と質疑

K. サハ・R. スリヤナラヤナ：熱帯地方において種々のバランスの関係を仮定した場合のジオポテンシャルの数値解	510—515
岩井 邦中：立体的構造をもった雪の結晶について	516—520
第49巻（昭和46年）目次	
正誤表	